

戦後ふくしまの考古学と複式炉

—考古ボーイ・考古ガールと縄文の大型炉—

日下部 善己

福島県文化財センター白河館企画展「戦後ふくしまの考古学 2～高度経済成長期の発掘調査～」

関連講演会 2 資料

令和 6 年 (2024) 3 月 2 日 (土) 13:30、於 同 白河館講堂

I 戦前の遺跡や遺物の調査と保存 (明治・大正・昭和前期)

1 歴史・文化等の資料の保存

- ①明治期 ○古器旧物保存方 (明治 4) 1871 美術工芸等品等の保存○古墳発見ノ節届出方 (明治 7) ○人民私有地内古墳等発見ノ節届出方 (明治 13) 開墾等不時発見の際の届出○古社寺保存法 (明治 30) 社寺の建造物や宝物の保護○遺失物法 (明治 32) 学術、技芸又は考古の資料となるような埋蔵物届出
- ②大正・昭和前期 ○史蹟名勝天然紀念物保存法 (大正 8) 1919、名所地や旧跡等の保護○国宝保存法 (昭和 4) 1929 国・地方公共団体又は個人所有の美術工芸品等の保存○重要美術品等ノ保存ニ関スル法律 (昭和 8) 歴史上又は美術上特に重要な価値のある物件の輸出又は移出の許可制度、戦時中昭和 18 年 12 月には事務停止となった (文化庁 1988)。

2 福島県史蹟名勝天然紀念物調査報告書 (大正 11 年 1922 ～)

- ①福島県史蹟名勝天然紀念物調査委員等による調査報告
- 第四冊 小此木忠七郎『福島県発見土偶図版解説・同図版』昭和 5
- 第五冊 八代義定『福島県に於ける古墳分布の状態』昭和 5
- 第七冊 八代義定『南湖公園と若松城跡』1935 昭和 10



II 戦後という時代・時期と考古学 (昭和 20 年代～)

1 新しい文化国家の建設、日本史・地方史の再構築と考古学研究

- ①歴史の実像を示す“実物”を研究対象とする考古学、新しい成果をいち早く公開する発掘調査隊に国民は期待し歓迎した。大学の考古学研究者はもちろん全国各地の小中高教員、郷土史家、考古学者そして教育委員会職員等がこの調査研究活動を牽引し、多くの若い学徒 (高校生・大学生) が参加した。
- ②静岡市登呂遺跡発掘調査 (昭和 18、22～25 年 1950)・保存と登呂小唄
- 登呂遺跡では弥生時代の社会構造を示す竪穴住居・倉庫、集落や水路・水田、木製品等を多数発見。
- この時、工事中発見→調査 (総合調査) →公有化→特別史跡指定・史跡公園・収蔵庫設置→教科書掲載、というプロセスをたどり、戦後日本の遺跡調査・保存・公開の貴重な先例として、後の全国各地の遺跡保存運動の道しるべとなった。
- この調査には多くの若い学生も参加した。学生の間では「ポール片手にわが手をそえて ひいたテープに心が通う せめて見せたいあの娘の前に 登呂が芽生えた恋心」『登呂小唄』が歌われていた (斎藤忠『日本の発掘』、同編『現代のエスプリ 考古学とは何か』至文堂 1968 所収)。この学生たちは戦後第 2 世代の考古学者として日本の考古学研究を牽引した。○当時の福島県学生考古学会員も参加。
- ③考古学研究者の全国組織「日本考古学協会」が発足した (昭和 23)。
- ④福島県教育委員会事務局に社会教育課設置 (昭和 23)、文化財係 (文化財調査保存係)
- ⑤法隆寺金堂壁画焼損 (昭和 24 年 1949) と文化財保護法の制定 (昭和 25)、埋蔵文化財の保護
- 遺物等の発見の届出様式は学校、役場、県教委出張所に問い合わせる。
- ⑥福島県文化財保護条例 (昭和 27)

2 考古ボーイや考古ガールが開いた「戦後ふくしまの考古学」の扉

①福島県学生考古学会（昭和24）の結成

○県内浜通り・中通り・会津の33校が参加。福島支部は、福島師範、福島高校、福島商高、福島女高、福島成蹊女高、安達高校、安達女高。

②福島県教育委員会事務局社会教育課『福島県の古代文化』（昭和25）、「東北地方の古代史は書きかえなければならない」

○戦後ふくしまの考古学の基本文献（非売品）
○同課社会教育主事梅宮茂著、県内の原始・古代文化史概説、考古学調査研究の速報と県内最初の「福島県遺跡地名表」等を掲載



③後年、県内各地の考古学者や郷土史家の調査協力により福島県遺跡地名表・遺跡地図が約10年毎に県教育委員会から発行されている。『福島県史』6（考古資料）所収の「福島県遺跡地名表」が県民に広く公開された。（昭和39）

④戦後ふくしまの考古学研究団体の設立（昭和30年1955～） 戦後第2世代～第3世代の活動

○福島県考古学会設立（昭和30）○『磐城考古』創刊（昭和32、磐城考古学会の前身団体刊）○しのぶ考古学会設立（昭和42）○福島大学考古学研究会公式発足（昭和43）○会津西部考古学会設立（同）○会津考古学会設立（昭和48）○阿武隈考古学研究会設立○奥久慈考古学研究会設立（昭和60）

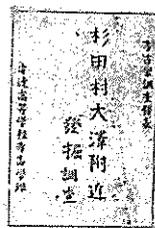
⑤『福島県考古学年報』（福島県考古学会）の創刊（昭和46）○これ以降、県内の発掘調査・考古学研究や遺跡保護等の動向、刊行文献等について、県内のみならず県外の研究者間の共通理解が深まった。

III 縄文時代中期の複式炉の新発見と命名（昭和24～37年1962）

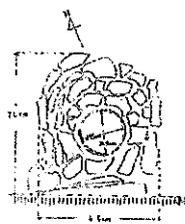
1 複式炉の発見と福島県立安達高等学校考古学班（昭和20年代）

○昭和24年、福島県立安達高等学校文化部考古学班の設立 ○「終戦と共に自由は開けて 我等に考える力は与えられ それを知ろうとしてきた」（安達高校考古学班1950）

○顧問教諭の指導を受けて分布調査・発掘調査を積み重ねた。



表紙



実測図



大沢遺跡 U字形の炉

(1) 原瀬上原遺跡（二本松市）「馬蹄形の炉」の調査（昭和24）1949

(2) 大沢遺跡（二本松市）住居の一部と「U字形の炉」の調査（昭和25）

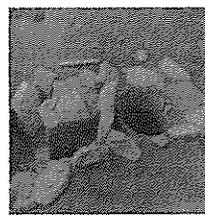
①我が国で複式炉が初めて報告・発表された遺跡

②高校生の発掘調査 ○写真・実測図作成と報告書作成。安達高等学校考古学班1950『考古学調査発表 杉田村大澤附近発掘調査』（写真は梅宮茂1950他に引用・紹介されている。）

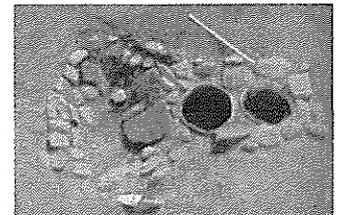
2 複式炉の命名と梅宮茂（昭和26～37）

(1) 「複式炉」名を初使用 日向道内遺跡（福島市）（昭和26）

(2) 「複式炉」の調査・命名 ○遺跡の保存・公開 飯野白山遺跡（飯野町）開墾作業によって発見。○地権者（発見者）の高い保護意識と郷土史家との連携



日向道内遺跡



飯野白山遺跡

①発掘調査では直径約7mの竪穴住居（柱穴6）と大型炉（石囲式炉と火つぼ土器2個、170×95cm）を発見した（昭和32）。

②飯野白山遺跡保存後援会の発会式では、梅宮茂「上代文化について」の講演会、スライド映写会「月の輪古墳」「登呂遺跡」、白山遺跡出土品展示会が行われた。

③明治大学後藤守一教授の調査、竪穴住居復元の壁構築や上屋の設計を指導（昭和32～33）

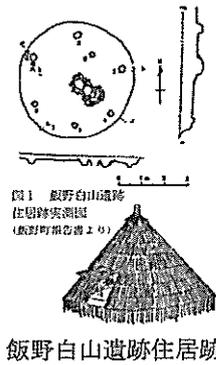
④復元住居完成 竪穴住居上屋の建築（昭和33）

⑤福島県史跡「飯野白山住居跡」指定（昭和35）1960

（3）学名「複式炉」の命名と考古学会での研究発表

①命名の経過 ○梅宮茂の提案に明治大学後藤守一教授が同意し、当該炉の学名は「複式炉」とされた。○梅宮茂「飯野白山住居跡調査報告」『福島県文化財調査報告書8』福島県教育委員会事務局（昭和35）、県内4遺跡

②考古学研究団体での研究発表 ○第2回福島県考古学大会 梅宮茂「伊達郡白山遺跡調査報告」（昭和35）○第28回日本考古学協会総会 梅宮茂「複式炉を伴う住居跡の諸例」（昭和37）、県内6遺跡8例



IV 連続する複式炉を伴う住居・集落の発掘調査 1963～1978（昭和38～53）

1 その時代的背景 ～大規模広域開発事業の増加と歴史・文化への国民の関心の高まり～

①発掘調査件数・同専門職員人数、発掘調査費用の全国的推移（文化庁資料）

②福島県史の編纂・刊行（昭和37～46年度）とそれに続く市町村史の編纂

③福島県の発掘調査総件数と主な調査理由・原因（県考古学年報、教育年報）

○昭和47年 計34件（農業開発9、東北自動車道6、工場敷地造成3、東北新幹線1、町史編纂5、史跡指定調査1）、○昭和53年度 計58件（農業開発17、宅地造成10、道路5、東北新幹線4、重要遺跡確認5、町史編纂3）

④新産業都市（常磐・郡山地区）地内発掘調査（昭和40・41）

⑤東北縦貫自動車道建設地内埋蔵文化財発掘調査開始（昭和44）、○福島県教育委員会の要請を受けた福島県考古学会の協力の下、県内各地の多くの考古学研究者が調査担当者、調査員等として参加協力した。地元住民・郷土史家、学校教職員、大学生・高校生も地域史や考古学研究のために多数参加した。

⑥東北新幹線建設地内埋蔵文化財発掘調査開始、史跡指定調査（関和久遺跡）開始（昭和47）

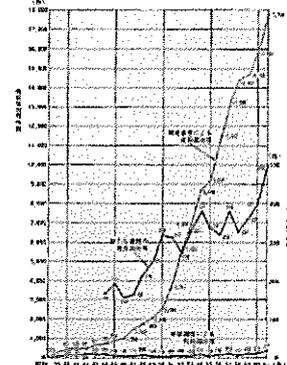
⑦県営圃場整備事業（伊達西部地区）関係遺跡発掘調査開始（昭和50）

⑧国営総合農地開発事業（母畑地区）地内埋蔵文化財発掘調査開始（昭和51）

⑨文化財の保護行政や調査研究・保存管理・公開活用の組織体制強化

○国文化財保護委員会埋蔵文化財発掘技術者研修会開始（昭和41）、文化庁発足（昭和43）、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター発足、同センター埋蔵文化財発掘技術者研修会開始（昭和49）

○福島県文化センター・福島県歴史資料館開館（昭和45）、福島県教育庁文化課発足、史跡指定調査（関和久遺跡）開始（昭和47）、同文化課に遺跡班設置、発掘技術者講習会開始（昭和49）、（財）福島県文化センターに遺跡調査課設置（昭和52）、福島県立博物館開館（昭和61）、福島県文化財センター白河館開館（平成13）

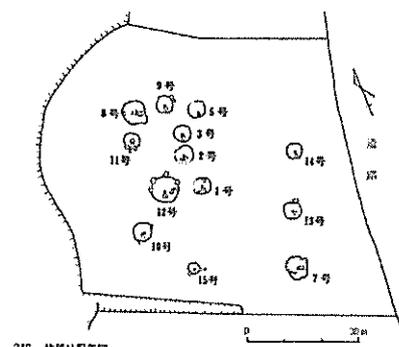


発掘調査等届出数

2 複式炉を伴う住居群・集落遺跡

（1）原瀬上原遺跡（県史跡） ○県内初めて縄文時代中期の複式炉を伴う住居群（12棟）・集落を確認し、複式炉が中期後葉の住居・集落に必ず（普遍的に）設置される室内炉であることが証明された。（昭和43）（目黒1969）

①遺跡を救った地元研究者の熱意 ○ぶどう園造成中に縄文土器や石組炉を発見した。○二本松市教育委員会によって4～12月まで断続的に4700㎡を調査 ○調査担当者は、福島県史編纂室目黒吉明、調査参加は、しのぶ考古学会・福島大学考古学研究会・新結成の原瀬上原遺跡保存会・緑ヶ丘高校生徒・地元有志。（全員当初はボランティア参加）



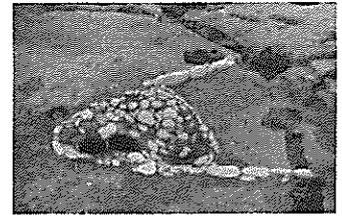
原瀬上原遺跡 住居・集落跡

②緊急調査 ○本県初のグリッド方式を採用 ○複式炉を伴う主柱3本の堅穴住居・集落の発見

③東京国立文化財研究所長関野克、東京大学理学部渡辺直経、慶応義塾大学文学部江坂輝彌が調査を指導した。○関野は現地では細い枝木を使って模型を作り、浮き桁構造を採用すれば主柱が3本でも4本柱等と同様の安定した上屋構造の竪穴住居を造ることが可能であるとした。

④現状保存と竪穴住居復元 ○工事中発見の縄文集落遺跡の保存と公開の先例となる。

⑤縄文時代中期の複式炉を伴う住居・集落として福島県史跡指定(昭和43)、○後年、当遺跡保存会は福島県文財保護功労者として表彰された。

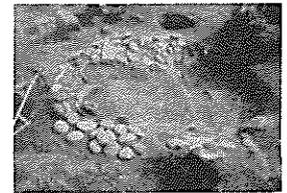


塩沢上原A遺跡I区11号炉

(2) 塩沢上原A遺跡(二本松市)、田地ヶ岡遺跡(同)(昭和46) ○大規模開発事業に係る調査増により複式炉を伴う集落の発見例が増加

3 浜通りや会津地方の複式炉の発見(昭和42～)

①浜通り 上栲窪遺跡(昭和42 鹿島町、相馬高校郷土部)、浦尻貝塚(小高町、福島大学考古学研究会)、八幡林遺跡(鹿島町) 他



石神平遺跡複式炉

②会津 和久平遺跡(昭和45 昭和村)、下中沢遺跡(柳津町)、石神平遺跡(金山町、周東一也1981) 他

4 隣接地域(山形県)での複式炉の認識過程(昭和42～、菅原哲文2006)

V 複式炉を考える主な視点

複式炉を考えるときには、主に以下のような視点がある。複式炉研究史、その形態・構造、構築のコンセプト(共通概念)、造作の技術、機能、出現と消滅、分布(時間的・空間的)、住居の構造・施設、集落の構成、複式炉を共有する社会の構造やその意識形態等である。ここではその中の幾つかを考える。

1 複式炉を持つ竪穴住居

①時代を問わず住居内炉の基本的機能は、暖房・調理・照明である。では竪穴住居内複式炉はなぜ大型化し緻密な構造になったのか。大型炉であることは、炉の面積・容積が大きい。多くの薪を焼き、火力の強い大きな炎を出して、上記機能の効果が増大するとともに、結果として燻蒸機能や食料乾燥保存機能が強化され、また熾き(焼き木が燃えて炭火状になったもの)や大量の木灰を生み出す。

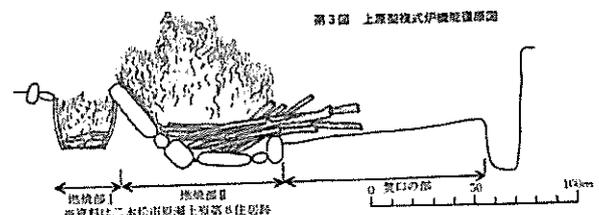
②これに注目して、複式炉の機能には灰の量産があると考えた。その考えに確信を持ったのは、昭和47年からの奥会津でのトチのアク抜き技法の聞き取り調査であった。アクが強い(強烈な渋みの)トチやドングリはアク(灰汁)抜きによって食用化される。それには「トチ一升、灰一升」と言うほど、多量の木灰を必要とする(日下部1973 他)。

③一般に竪穴住居跡内の炉は、基本的にはその中央部に設置される。しかし、複式炉は土器埋設の部分を住居中央付近に置き、敷石石組の部分や木尻部分(焼き口)は住居の壁際に向かって構築される。また木尻部は住居の入口部あるいはそれに隣接する。多くの薪の搬入、木灰の管理等にも便利である。

④竪穴住居の主柱は3～6本等で、周溝を巡らせる。内部には、配石遺構、埋甕(底部穿孔)、入口部にはピットや埋甕、炉付近には敷石(敷石住居)が存在する遺構もある。

2 複式炉の構造と機能

複式炉は基本的には土器埋設部、敷石石組部、前庭部の3つの部分で構成される。各部は簡略化されたり、前庭部は付随しなかったりする場合もある。



(丹羽茂原図)

①灰を量産した複式炉

ア 土器埋設の部分(熾き火の利用・調理や木灰管理)

イ 敷石石組の部分(薪の燃焼、調理、木灰の量産)

ウ 炉の前庭的な部分(焼き口部・木尻部、薪を燃焼部分に差し入れる焼き口、薪の保管)

前庭部が住居構造上も明確に存在することは、燃料の保管場所の確保、火の番的役割の強化が、つま

り調理・暖房はもちろん木灰生産・管理の定形化が図られたと言える。前庭部を占有空間として構造上明確化しない、即ち入口付近の床面に段差や区画を設けない場合はその場が他の機能にも使用可能空間であることをも示している。

②主食になった堅果類

堅果類（トチやドングリ）は下表のように、米や小麦と比較しても縄文人の日常生活を維持するだけの栄養価があった。縄文時代中期における堅果類食用化技術の向上発展は大きな意義を有する。

堅果類や穀物類の成分		可食部100g当たりのg (%)				
品名	カロリー (kcal)	水分	タンパク質	脂質	炭水化物	灰分
クリ：生	164	58.8	2.8	0.5	36.9	1.0
クルミ：炒り	674	3.1	14.6	68.8	11.7	1.8
トチ：蒸し	161	58.0	1.7	1.9	34.2	4.2
トチ：乾	365	12.3	5.3	4.5	75.8	2.1
コナラ（ドングリ）	284	28.1	2.9	1.7	65.4	1.9
米：水稻穀粒：精白米	358	14.9	6.1	0.9	77.6	0.4
小麦：玄穀：国産	337	12.5	10.8	3.1	72.1	1.6

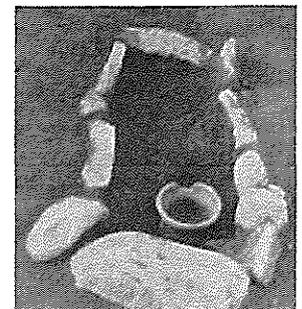
*文部科学省「日本食品標準成分表2015版（七訂）」、松山利夫1982等による。

VI 大型炉の登場とその系譜

東日本では縄文時代中期になると、堅穴住居内に径50cmほどの石囲炉等が造られるが、やがて長大化・大型化し長径が1mを超え数mにも及ぶ。火を焚く・使う部分の面積の拡大である。また土器を石囲炉内に埋めて使用することもある。

1 中部高地型大型炉（長方形炉） 長野県富士見町曾利遺跡

中部高地（長野等）地域と北陸・新潟等その隣接地域を中心として、長径1m以上の大型石囲炉が分布する。この大型炉は縄文時代中期中葉頃まで使用される。曾利遺跡等では長方形炉内に土器を埋設している例もある。ここではこの炉を「中部高地型大型炉」と呼ぶ。しかし、この炉は八ヶ岳山麓地域では中期後葉から小規模な石囲炉に変化し、集落数も激減してしまう。（藤森栄一・桐原健他1965、宮坂虎次・鶴飼幸雄・勅使河原彰1986）



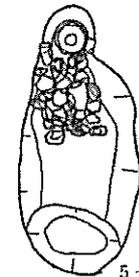
曾利18号住居炉趾

2 東北型複式炉（土器埋設炉と敷石石組炉） 福島県二本松市原瀬上原遺跡

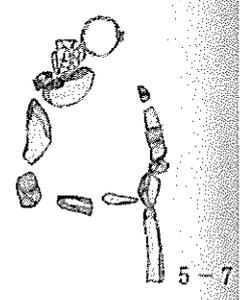
縄文時代の中期後葉になると、堅穴住居内に緻密な石組みによって造作された大型炉が出現する。土器を埋設してその周囲に整然と石を敷き詰め囲んだ炉と石を組んで底面にも敷き詰める石組炉とを連結したような形態の大型炉である。

この複式炉は、大沢遺跡、原瀬上原遺跡（県史跡）（目黒・丹羽1969）を始め福島・山形・宮城・新潟から数多く発見されている。

その最北辺は青森県丹後谷地遺跡（八戸市）や永野遺跡（坂本真弓2002）であり、津軽海峡を越えて北海道には至らない。南は北関東そして西は北陸まで分布している（森2017）が、中部高地や関東地方の大部分は含まない。形態的には地域的



丹後谷地遺跡



永野遺跡

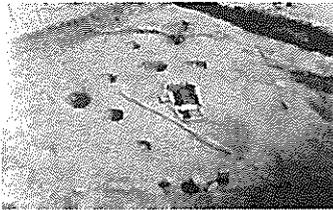
特色もあるが、炉構成の基本的意識は同一である。ここでは、これを「東北型複式炉」と呼ぶ。

土器分布圏から見ると、その分布の中心は「大木式土器分布圏」と「馬高式土器分布圏」である。この複式炉分布圏は、気象条件や動物・植物相も類似する地域であり、後世の奥羽越列藩同盟の領域ある

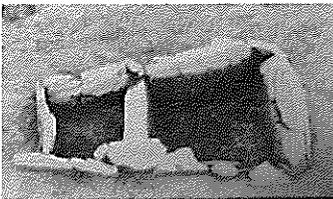
いは新潟を含めて東北7県と呼ばれたかつての領域にほぼ相当している。これが東北・北陸・北関東に及ぶ縄文時代中期後葉の謂わば「東日本東北型複式炉文化圏」である。

3 北陸・飛騨型複式炉* (主炉と副炉) 岐阜県高山市堂之上遺跡 (もう一つの複式炉*)

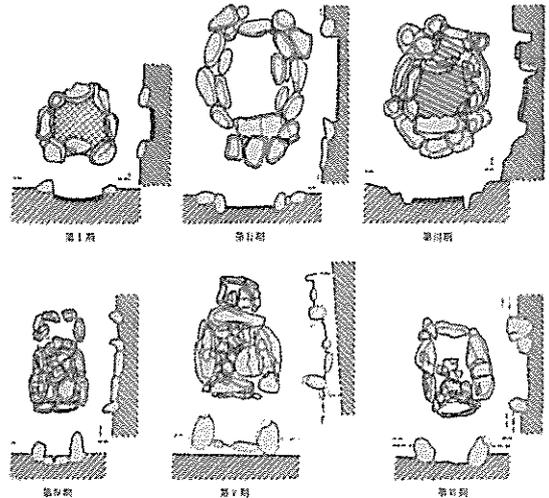
一方、もう一つの「複式炉*」が存在する。「方形炉」と「方形炉」を二つ連結したような形態、あるいは長方形石囲炉を二つに区画した形態の炉である。岐阜県高山市の堂之上遺跡(国史跡)が好例である。縄文時代中期に出現する。この炉は、石川・富山・新潟そして飛騨地方に分布している。これを、「北陸・飛騨型複式炉*」と呼ぶ。積雪(豪雪)地帯に分布する炉である。



堂之上遺跡第12号住居



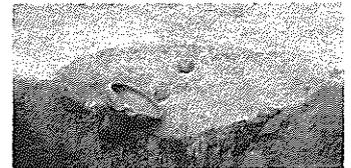
この複式炉*は、面積の大きい主炉とやや小振りな副炉で構成される。基本的に敷石を伴う。堂之上遺跡では中期後半には大型の石囲炉(河原石を使用)から複式炉*(扁平な板石使用)へと変化する。複式炉*の出現時期は縄文時代中期末である。大形石囲炉に代わって北陸的な複式炉*(石川県立歴史博物館1998、東市瀬遺跡)が造られたことは、それまでの信州から北陸へと文化の影響・交流が大きく変化したことを物語っている。(大野政雄・戸田哲也他1978)



金沢市東市瀬遺跡 縄文中期の炉の変遷

4 東関東地方の「斜位埋設土器炉」 千葉県佐倉市寺崎一本松遺跡 (複式炉を意識した炉)

関東地方東部の千葉県寺崎一本松遺跡にて、複式炉を意識したような炉が発見されている。この炉は、楕円形で船底状に掘り窪め、その穴の端部に土器を斜位に埋設している。この穴の中で火を焚いている。この炉は「斜位埋設土器炉」と呼ばれる。土器を囲う石や敷石は施されていないが形態的には東北型複式炉をモデルとしていると考えられる。千葉県内ではその他7市町で同様の炉が確認され、特に酒々井町墨木戸遺跡からは9例も報告されている(堀越正行2014)。



寺崎一本松遺跡 斜位埋設土器炉

この地域は東北型複式炉の分布圏外ではあるが、複式炉を構築する社会(南東北・北関東)からの強い意識的な影響を感じることができる。

5 東日本大型炉分布圏 (縄文時代中期の中心地帯の移動)

縄文時代中期中葉前後あるいは後葉という時期差はあるが、中部高地から東北・新潟・北関東、北陸・飛騨地方を網羅する謂わば「東日本大型炉分布圏」という地域圏が創出された。この地域は植生図から言えば、本州の落葉広葉樹林帯とほぼ一致しており、積雪地帯であるこの地の自然環境、植物相・動物相がこの地域圏に大きな影響を及ぼしたこと、その根幹をなすことも読み取れる。

この大型炉は中部高地から東に継承されより緻密に造作された東北型を、西に継承されシンプルな北陸・飛騨型を出現させた。

なお、大型炉から小型炉への炉の規模・機能縮小変化、そして遺跡数(人口)の激減という社会構造変化については、中部高地地方(八ヶ岳山麓等)では、中期後葉から起こった。一方、この現象と入れ替わるように中期後葉に成立する東日本東北型複式炉分布圏、北陸・飛騨型複式炉*分布圏は大発展期を迎え、東日本縄文時代の中心地帯になって行くのである。中部高地から北陸・飛騨へ、あるいは越後・東北南部への、日本縄文時代中期社会の「中心地帯の移動」である。

Ⅶ 複式炉出現の歴史的意義

1 炉の大型化（機能分化）と社会構造の変化

以上を踏まえて、「複式炉時代」とも言える縄文時代中期後葉についてまとめておくことにする。

縄文時代のアク抜き技術に必須である木灰の大量生産を可能にしたのが大型炉である。

アク抜き技法の確立によって、狩猟・採集・漁撈を社会の生業基盤とする縄文時代の中で、採集物であるトチ・ドングリ等の堅果類の植物質食料が主食になった。それによって、縄文人の生命維持装置である「堅果類の森林と複式炉」とを有する集落（社会）が増大、つまり人口が拡大し、縄文社会の一大発展期が創り出された。それは東日本各地の地域社会を大きく変革していく。

複式炉の登場によって、具体的には以下のような状況が縄文時代中期の人びとの身边に起こった。その地域社会（地域圏）の変化を整理しながらまとめる。

落葉広葉樹林の広域展開によって東日本の縄文人たちは、春から秋の豊かな自然の実りを手中にするとともに、積雪（豪雪）地帯での厳しい冬をも生き抜く知恵・技術を会得することになる。先ず食糧資源の安定的確保が可能となったことが重大な画期となる。集落や生業（生産活動）に係わる縄文時代地域社会の構造的変化である。

ア 堅果類の食用化技術（アク抜き）の確立

イ 冬期間の保存食となるトチやドングリ等の堅果類の森林（樹木）管理強化

ウ 堅果類採集活動の強化そして各住居内や貯蔵穴等による貯蔵技術の向上

エ 森林管理等にも適した見晴らしのよい山麓の台地や丘陵先端部に主たる集落を形成し、さらには自然堤防上や中山間地にも進出して、時には低地を望む微高地等に分村集落を造営

オ 複式炉の機能と設置場所を重視した堅穴住居建築構造・施設配置・間取りの変化

カ 複式炉によるアク抜き用の木灰の量産・管理体制の整備

キ 厚手の縄文土器（アク抜き加熱用の鍋）や凹石・敲石・石皿・磨石（調理関係用具）量産・充実

ク 森や原野等での狩猟活動や河川・湖沼、海岸での漁撈活動は従前通り継続

これらのことが縄文中期集落（社会）の共通認識や行動基準となることにより動物の狩猟活動等より比較的容易に安定して採集できるトチやドングリ等の堅果類は、縄文人の日常を支える主食の位置を占めることになる。さらに、食料確保の安定化は、人口増を引き起こし、新たな集落が各地に分散拡大（遺跡数増）する。縄文時代中期はいわばニュータウンラッシュであり高度成長期である。それは日本縄文時代中期社の中心地帯を形成した。

当時の環境としての自然に積極的に働きかけ（対話・共生・同化・畏敬）、能動的に生きぬいた縄文時代中期の人びとの優れた知恵と高度な技術の結晶がこの複式炉の登場“複式炉時代”といえる。

2 “複式炉時代”の終焉

しかし縄文時代中期の終末期頃になると、自然環境が冷涼化し、植物相等の自然環境に大きな変化が起きた。一方ではこれまで集落数が増大して人口が膨張したり、それを支える食料を獲得するための生業活動エリア（テリトリー）が不足する事態が生じたと考えられる。この自然環境の冷涼化と社会環境の人口膨張は結果して食料不足・生活維持困難状態を引き起こした。自然依存段階における外圧（自然現象）・内圧（社会経済現象）による縄文バブル社会の崩壊である。

縄文時代中期後半の生命維持装置とも言うべき複式炉を利活用して広域的な東日本複式炉地域圏を構成していた多くの人びとは、生命維持困難というこの大きな時代的变化に対応する必要に迫られた。そこで今までの居住地を離れてよりよい生業活動が可能な新天地を求めて移動して行ったと考えられる。

複式炉分布圏では、縄文時代中期末から後期初頭には遺跡数の大幅減少（人口減）が起こり、住居内炉も大型炉（複式炉）から方形炉や円形炉に縮小してしまう。つまり複式炉時代、東日本複式炉分布・交流圏は完全に終わりを告げることになり、やがて新たな後期・晩期の世界が展開することになる。

Ⅷ 複式炉や縄文社会を次代につなぐ（考古学研究と地域学習）

私は何者なのか、一体何処からきたのか。自分が生まれ育ち、また今住んでいる地域（ふるさと）の歴史や文化について、歴史学や考古学等の研究成果に学びながら、地域の良さを知り、活かし、それを誇りとして、伝える教育活動（地域学習）が県内各地の学校で積極的に展開されている。

その活動を企画・実践している多くの学校の先生方の要望に応じて、郷土史家（地域史研究者）、歴史学研究者、考古学研究者等が数多くこの取り組みに協力・参画している。

- ①福島県史跡「原瀬上原遺跡」の学習（二本松市立原瀬小学校）
- ②「高稲場遺跡」の学習（二本松市立旭小学校）

「明日を拓く今日という日は、昨日から続いている今日であることを忘れてはならない。」

（人の成長や地域の発展は、過去の人や地域が歩んできだ日々のたまもの）

<主な参考・引用及び関連文献等>（既出の文献等を除く）

藤森栄一・武藤雄六・桐原健他 1965『井戸尻』中央公論美術出版、目黒吉明編 1969『上原遺跡概報』二本松市教育委員会、福島市史編纂委員会（梅宮茂）1969「日向道内遺跡」『福島市史』6 福島市教育委員会、丹羽茂 1971「中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』12 福島県考古学会、丹羽茂 1971「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学会研究会研究紀要』1 福島大学考古学研究会、目黒吉明・木本元治・一条孝夫・日下部善己他 1972「塩沢上原 A 遺跡」『福島県文化財調査報告書』36、日下部善己 1972「縄文時代の東日本における生産用具の時間的空間的様相」『福島考古』13、日下部善己 1972「縄文時代中期における社会の発展の契機に関する研究」、越田和夫 1972「縄文時代中期における住居跡（炉跡）について」『福島大学考古学研究会研究紀要』2、渡辺誠 1972「縄文時代における植物質食料採集活動の研究」『古代文化』24 - 5・6 古代学協会（同 1969 予察）、八巻（岩淵）一夫 1973「東北地方南部における縄文時代中期末葉の集落構成」『福島考古』14、日下部善己 1973a「食用としてのトチの実—堅果類の食用化（その 1）—」『TIMEANDSPACE』1 - 1 福島第四紀研究グループ、同 1973b「木の実の研究」『福島第四紀研究グループ第 1 回総会発表資料』（同 2010『縄文時代の基礎的構造』所収）、梅宮茂 1974「複式炉文化論」、丹羽茂 1974「福島県における縄文中期の住居集落研究の現状と課題」『福島考古』15、渡辺誠 1974「ドングリのアク抜き—野生堅果類利用技術伝承に関する事例研究・1—」『平安博物館紀要』5、大野政雄・戸田哲也他 1978『堂之上遺跡 第 1～5 次調査概報』岐阜県大野郡久々野町教育委員会、日下部善己 1978『夏窪遺跡』梁川町教育委員会、周東一也 1981『石神平遺跡』金山町教育委員会、日下部善己 1981『高稲場遺跡』岩代町教育委員会、目黒吉明 1982「住居の炉」『縄文文化の研究』8 雄山閣、松山利夫 1982『木の実』法政大学出版局、中村良幸 1982「複式炉」について—岩手県の事例を中心として—『考古風土記』7 鈴木克彦刊、宮坂虎次・鶴飼幸雄・勅使河原彰 1986「縄文時代」『茅野市史』上巻原始古代、鈴木良一 1986「複式炉と敷石住居」『福島の研究』1（地質・考古篇）清文堂、柏村サタ子他 1987『聞き書 福島の食事』（日本食生活全集 7）農山漁村文化協会、文化庁 1988『我が国の文化と文化行政』ぎょうせい、押山雄三 1990「福島県の複式炉」『郡山市文化財研究紀要』5 郡山市教育委員会、『論集しのぶ考古 目黒吉明先生頌寿記念』1996 掲載複式炉関連論文（執筆：梅宮茂、中田茂司、岩淵一夫、森幸彦、能登谷宣康、井憲治）及び特集「研究史：目黒先生と福島県の考古学」、石川県立歴史博物館 1998「大型石組炉」『展示案内』、荒木隆 1998「初期複式炉の発生と展開について（予察）」『福島考古』39、梅宮茂・江藤吉雄・大迫徳行・斎藤康夫・鈴木啓・目黒吉明・渡邊一雄 1999「特集；福島県考古学会のあゆみ」『福島考古』40、阿部昭典 1999「複式炉の研究—複式炉の成立について—」『新潟考古学談話会会報』20、坂本真弓 2002「沢部型複式炉の現在—青森県内の複式炉集大成から—」『海と考古学とロマン—市川金丸先生古希記念献呈論文集—』同先生古稀を祝う会、日下部善己 2003「複式炉以前—U字型の炉から複式の炉へ—」、菅原祥夫 2003「複式炉の成立過程とその意義」『福島考古』44、菅原哲文 2006「山形県における複式炉の様相」『（財）山形県埋蔵文化財センター研究紀要』4、日本考古学協会 2005 年度福島大会実行委員会 2006「シンポジウム I “複式炉と縄文文化” 総合討論の記録」、渡辺誠 2006「複式炉研究の問題点」『福島考古』47、福島雅儀 2012「阿武隈川上流域における縄文中期から後期への集落変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』172、安齋正人・阿部昭典・佐々木雅裕・吉川耕太郎・星雅雅之・須原拓・菅原啓文・菅野智則・国木田大 2012『東北地方における中期／後期変動期 4・3 k a イベントに関する考古学現象①』同実行委員会、堀越正行 2014「縄文時代」『佐倉市史』考古編本編、鈴木啓 2014「梅宮茂と複式炉」季刊『古代文化』66 - 3、森幸彦 2017「複式炉文化論を検証する」『発掘ふくしま』4 福島県立博物館、日下部善己 2019『ふくしまの地域社会を活かす人びと』歴史春秋社、阿部昭典 2019「屋内儀礼—複式炉付住居における屋内空間と儀礼行為の復元—」『季刊考古学』148 雄山閣、福島民報、福島民友、福島中央新報、